

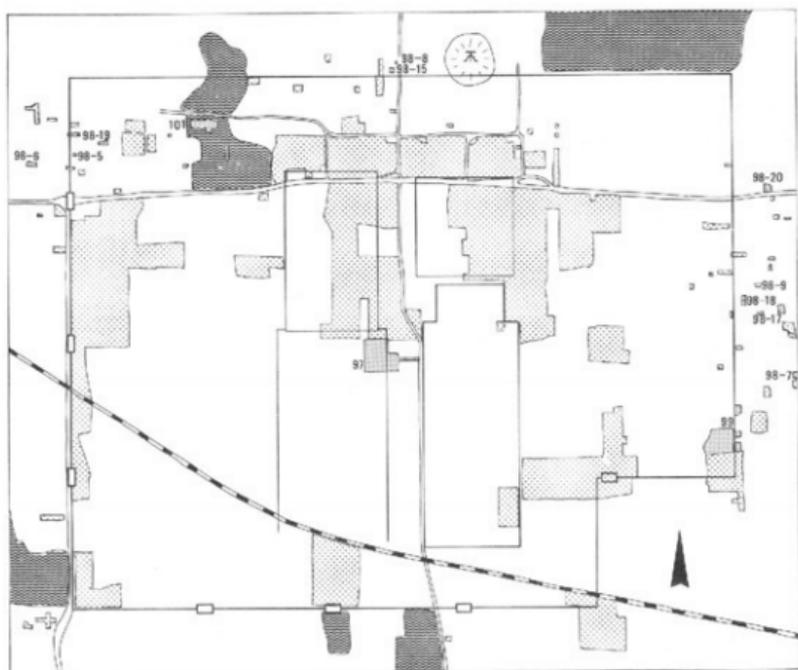
昭和51年度 平城宮跡発掘調査部

発掘調査概報



昭和52年5月

奈良国立文化財研究所



第1図 平城宮発掘調査位置図

表紙カットは第99次調査出土緑釉香炉蓋復原図

## 目 次

I	推定第1次朝堂院地区の調査(第97次) .....	3
II	東院園池と周辺の調査(第99次) .....	12
III	佐紀池の調査 .....	22
IV	薬師寺西塔の調査 .....	30
V	法華寺周辺の小規模調査 .....	34
VI	その他の発掘調査 .....	40

## 昭和51年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報

平城宮跡発掘調査部は、昭和51年度の発掘調査を第1表のように実施した。本年度は、昨年比して、小規模な発掘が増加しており、平城宮周辺の地形変更が再び活発化した傾向を示している。

次数	調査地区	面積	調査期間	備考
97	第一次朝堂院東第1堂	3,350m <sup>2</sup>	7.1~7.24	
98-1	右京北条橋および北辺坊(奈良市山崎町105-1.106-1)	200	4.12~4.21	奈良ファミリー駐車場
2	平城宮東面大垣外 ( * 法華寺中町662)	7.5	5.11~5.13	西口武雄氏宅
3	平城宮佐紀池 ( * 佐紀西町2647-2)	14	5.17~5.18	高村みよ子氏宅
4	法華寺旧境内 ( * 法華寺町630)	15	6.15	奥村雅則氏宅
5	平城宮鳥寮北方 ( * 佐紀町2590)	5.2	6.28	古田平蔵氏宅
6	右京一条二坊二坪 ( * 二条町1-29-1.2)	100	7.1~7.5	尾基善一氏宅
7	法華寺旧境内 ( * 法華寺町630-16)	90	8.12~8.19	久保敏一氏宅
8	平城宮北面大垣外 ( * 佐紀町2777-1.2)	4	8.30	石田ふじ江氏宅
9	法華寺旧境内 ( * 法華寺町655)	9.5	9.2~9.3	川崎健治郎氏宅
10	平城宮大膳職北方 ( * 佐紀町2770)	24	11.16~11.18	三樹護氏宅
11	右京二条一坊小路 ( * 二条町1-1-7)	28	12.9~12.15	光橋静徳氏宅
12	(欠番)			
13	東大寺旧境内 ( * 雑司町97)	58	1.10~1.19	鼓房幼稚園
14	右京五条条間路等 ( * 五条町、平松町)	28.5	1.19~3.30	奈良県浄化センター
15	平城宮北面大垣外 ( * 佐紀町2777-1.2)	11.5	2.9~2.14	石田勇氏宅
16	西大寺境内 ( * 西大寺芝町)	24	1.26~1.28	西大寺
17	法華寺境内 ( * 法華寺町882)	122	2.3~3.1	法華寺
18	平城宮東面大垣外 ( * 法華寺中町662)	63	2.15	西口武雄氏宅
19	平城宮西北宮衛地区 ( * 二条町1-2595)	17.1	2.15	横田進氏宅
20	平城宮東大宮垣外 ( * 法華寺町935-2)	86	2.22~2.29	川崎泰信氏宅
21	(左京一条二坊十坪) 法華寺旧境内 ( * 法華寺町630-24)	70	2.28~3.5	川崎裕久氏宅
99	東院園池	2,797	7.26~1.19	
100	右京五条四坊三坪 (奈良市平松町312)	2,360	8.19~10.8	奈良市(学校建設)
101	平城宮佐紀池 ( * 佐紀町2655外)	1,294	1.7~3.25	
その他	右京五条一坊三坪 ( * 五条町202-1)	40	10.19~10.28	奈良県浄化センター
	東大寺旧境内 ( * 水門町98-99)	250	12.4~12.15	整枝園
	東大寺西面人垣 ( * 今小路町45-1外)	335	4.21~6.23	奈良県労生協
	粟師寺西塔 ( * 西ノ京町460)	550	7.5~8.25	粟師寺
	法隆寺境内 (牛勒郡斑鳩町法隆寺)	664	9.27~12.11	法隆寺
	東大寺旧境内 (奈良市雑司町406-1)	60.6	3.28~4.4	東大寺学園

第1表 昭和51年度発掘調査一覧表

## Ⅰ 推定第1次朝堂院地区の調査（第97次）

平城宮跡第97次発掘調査は、推定第1次朝堂院地区の東北部（6ABS-A・B、6ABF-B地区）で行った。この地区は1967年に発掘した推定第1次内裏地区を囲む築地回廊の南側に位置し、朝堂建物に推定されている上壇が残存している。調査は1976年4月1日から開始し、7月24日に終了した。その調査面積は3,350㎡である。

### 1 遺構

平城宮造営以前、この地域は北から南に下る傾斜地で、6ABF-B地区の中央部でもっとも低く、浅い谷状を呈する地形が想定できる。旧地表面は谷筋に沖積した軟弱な黒色粘土によって覆れている。この奈良時代地山面にともなう遺構には、溝4条、土壇1などである。その後、谷を埋める大規模な整地が施工されており、黒色粘土の地山上に積む盛土整地は大きく三層に分かれ、ここでは下から第Ⅰ盛土層・第Ⅱ盛土層・第Ⅲ盛土層とよぶ。

検出した主な遺構は建物4棟、塀および築地4条、溝12条、瓦敷面1箇所、井戸1基、土壇2穴、円筒埴輪列1列などである。これらの遺構は盛土層を基準にして4期に分つことができ、以下時期別にのべることにする。

#### A 期

平城宮造営以前の遺構で、古墳跡と4条の溝と浅い土壇がある。

古墳跡、6ABF-B地区の東限で、原位置にある2本の円筒埴輪を検出し、この付近に埴輪片の散布が顕著であった。円筒埴輪の間隔は約2.5mであり、墳丘の最下段に樹立したものかもしれない。また、西方に下降する地形は周濠の名残りかもしれない。ただ発掘面積が狭いことなどから埴輪形を想定する手掛りはない。

溝SD8372は6ABS-A地区の北部にある東西方向の溝である。発掘区の西端から2.6mを検出した。溝の底にわずかに水の流れた痕跡をとどめ、その上部を第Ⅰ盛土層で埋立てている。この溝は平城宮の南北をはば2等分する位置にあたる。溝SD8373は溝SD8380の南方10.5m離れて平行して流れ

る溝で、発掘区の西限から約20mを検出した。2条の溝は堆積土に遺物を含まないが、方位や堆積状況が一致しており、同時期のものとみられる。

溝SD8380は溝SD8373の南12.5m離れて東西に流れる溝である。発掘区の西限から31mを検出した。この溝は東で南へ若干振れており、溝SD8373と関係するか否かは不明である。溝SD8385は溝SD8380の南25.5m離れて東西に流れる溝。溝SD8380と同様に南へ傾き、発掘区西限から約10mのところまで基壇建物SB8400の掘込地業によって破壊されている。

土壌SK8418は6ABS-A地区東辺から東にひろがる浅い土壌で、うちに栓皮や木材の加工片が約10cmの厚さで堆積している。造営時の作業木屑を棄たものである。今回の調査区の北方に位置する第91次調査でも同じような状況がみられ、そこでは和銅年間の造営を示す木簡をふくんでいた。

## B 期

第I盛土層は灰白色粘土と青灰色砂からなり、もっとも厚い部分では50cmに達している。この盛土のう上に構築する遺構がB期に属し、溝と塀とがある。

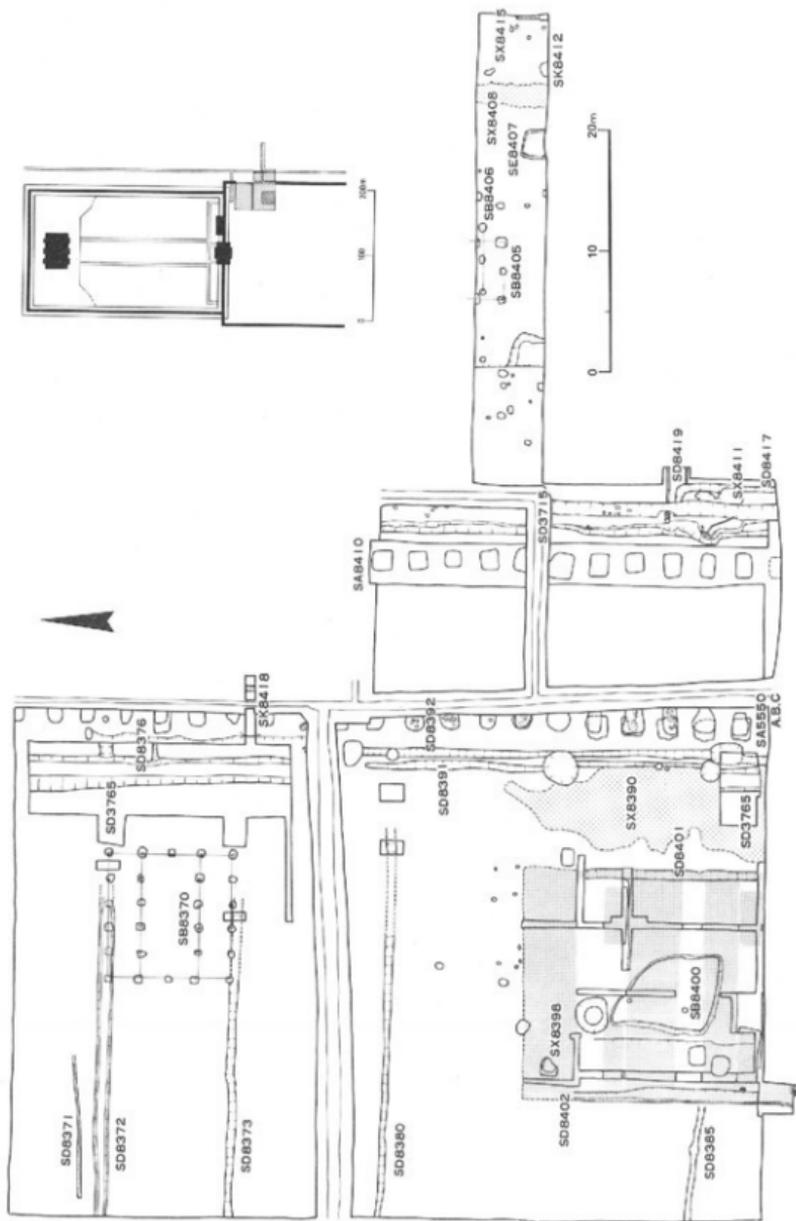
溝SD3765は6ABS区の東限から約5m西に位置する南北に流れる大溝で、第II盛土層を除いて検出した。この溝の所在は先年の調査で確認しており、遺構の保存上A地区のみについて発掘し、発掘区南限の土層観察用トレンチにおいて、さらに南流することを確認した。溝の堆積は上下二層に分れ、下層からは奈良時代初期の瓦や土器が出上した。溝SD8376は東岸から大溝へ注ぐ溝であるが、発掘範囲が狭く性格不明。

塀SA8410は溝SD3765の東方17.5mに位置し、南北にのびる掘立柱塀である。柱穴11間分を検出し、その柱間は約3mである。

## C 期

第II盛土層は灰褐色粘土からなり、6ABS-A・B地区の東半にひろがり、厚いところで約40cmであった。この盛土上に構築する遺構がC期に属し、遺構として塀と溝とがある。

塀SA5550Aは6ABS区の東限を画する畦畔に沿って南北にのびる掘立



第2図 第97次調査遺構図

柱屏で、先年の調査で北方から南下することが確認されている。柱穴は第Ⅱ盛土層上から掘込むか、上部に第Ⅲ盛土層とD期の築地積土が覆っているの、部分的な検出にとどまるか、柱間は約3mであった。第41次調査においてこの屏が推定第1次内裏の築地回廊に曲尺形にとりつくことが判明しており、今回検出の南限までが26間(77m)ということになる。この屏は推定第1次朝堂院の東面を囲する施設で、推定第1次内裏中軸線から約107m(360尺)東に位置し、これによって朝堂院の東西幅員を214m(720尺)に想定することができる。

溝SD3715はすでに北方地域で確認されており、平城宮の中心部を南北に貫通する幹線水路である。塀SA5550Aの東方18mに位置し、溝SD3765の後身とみられ、奈良時代の全般を通じて存続する。溝は2回の改修を受け、堆積土は上・中・下の三層に区分できる。下層出土の木簡には神亀から天平初年の年紀があり、堆積の年代をたどることができる。また、上層からは奈良末平安初期の土器片が出土している。溝SD8419は幹線水路に東から注ぐ溝であり、溝SD3715の上層の時期以前に廃絶している。

会所SX8411は溝SD3715の流路に付設する。一辺4m程の方形を呈し、上流部分に杭列とそれに落込んだ板材の一部が残存している。この遺構には溝SD3715の下層の堆積土である暗灰色粘土が堆積しており、木簡が多く出土した。

#### D 期

第Ⅲ盛土層は褐色粘土からなり、6ABS区にひろがり6ABF区におよんでいない。推定第1次朝堂院の東面を限る屏が築地に改造され、その内側に掘込地業の基壇建物がつくられる。

基壇建物SB8400は東第1堂に推定してきた土壇の周囲で検出した。基壇は掘込地業を行っているの、上部を消失していてもその平面形をたどることができる。今回は南北棟基壇の北部を検出し、東西幅約19m、南北長20m以上でさらに南の発掘区外にのびることが判明した。現存土壇の上半部は後世の盛土であったが、下半部に約50cmの高さで基壇積土をのこしている。削平がひどく

柱位置や基壇化柱の痕跡はない。基壇の東西の辺縁には幅50cm内外の浅い溝がある(SD8401、SD8402)。

基壇の掘込地業は第Ⅲ盛土層を切込んで行う。地業は基壇の全域について行っていない。東西の長辺に幅0.8mの溝を掘り、これを東西方向の布掘地業でつなぐ。つまり、北辺から4.5m、8.6～13.0m、14.8～17.6m、19.6～22.3mの4個所に布掘りし、北から一番目と三番目の掘残し部分に、東・西寄りに2.0×5.5m内外の長方形の坑を掘る。このような掘込地業は30～50cmの深さで残存し、整地層の上面まで粘質土で粗くつき固めている。整地層から上の基壇はバラス混り粘質土と砂質土を用いて、下部よりも丁寧に版築している。このような掘込地業の形状は、必ずしも柱位置と一致しておらず、建物の全貌を検出したうえで再考したい。基壇の西北隅に1個の礎石が残存するが、すでに原位置から移動している(SX8398)。花崗岩製で柱座の造出しをつくるが、2次的に半割面を平滑にして再使用したものである。

基壇建物の東側に瓦敷SX8390がある。瓦敷は基壇の東辺から東面築地SA5550Bの間にひろがるが、基壇北辺のあたりで疎らになって消失する。

築地SA5550Bは東面を画する塀SA5550Aの後身である。第Ⅲ盛土層の上面に南北にのびる帯状の黄褐色粘質土からなる積土があり、築地土壇の積土にかんがえられる。残りのよい部分では、なお40cm程度の厚さをとどめている。この築地に沿って南北にのびる溝SD8392が西側の雨落溝である。

塀SA5550Cは築地SA5550Bを掘立柱の塀に改作したものである。柱間は約3mで、21間分を検出した。この塀の柱心はC期の塀SA5550Aの柱心から東へ50cm移動している。溝SD8391は掘立柱塀にともなう排水溝である。

掘立柱建物SB8370は基壇建物SB8400の北縁から2.4m北方にあり、西妻を基壇の中軸線にそろえる。5間(10.15m)×4間(10.15m)、南北廂付の東西棟建物で、柱間は桁行2m、梁間2.4m、廂間2.7mで、柱掘形の底には礎板を敷く。

溝SD8417は大溝SD3715の東岸にL字形にとりつく。会所SX8411の廃絶後に支流として設けたもので、大溝に沿って南流する。

掘立柱建物SB8405、SB8406は、6ABF-B地区で重複する柱穴で、南北棟建物の一部に想定しうる。井戸SE8407は建物SB8405・SB8406の東南にある。掘形は一辺2.5mの方形を呈し、深さは約1.0m、底に礫を敷く。井戸底の四隅には凝灰岩や玉石を据えており、井戸枠の隅柱の据付痕跡とみられる。出土遺物からすると、奈良時代中期に掘鑿し末期に廃絶していることがわかる。

井戸SE8407の東に瓦溜りSX8408がある。瓦片が南北方向にのび、西方に向かって下降する。瓦片は整地土とともに敷かれており、整地の地固めに瓦片を敷いたものらしい。土壌SK8412は瓦溜りの東側にある土壌で、北半分を検出し、なかに奈良時代末期の土器があった。

## 2 遺物

### 木筒

木筒は主として大溝SD3715とそれともなう会所SX8411から出土した。ほかに溝SD8419からも出土したが、きわめて少ない。

大溝SD3715から20点、会所SX8411から138点出土している。大溝SD3715では下層の堆積土である暗灰色粘土層から出土し、会所SX8411では杭や板材の残る南北の暗灰色粘土層から出土した。大溝SD3715と会所SX8411の暗灰色粘土層は同一層位であり、ここでは一括してあつかう。それらの木筒はまとまった性格を示しており、神亀から天平初年に至る間に宮内で行った造営事業に関するものである。以下代表的なものを例示しよう。

1  里工作高殿新短枚桁二板 

[殿カ] [駄カ]

これと類似する木筒に「西高殿四人」、「東高

2・右二人丸桁二枚 継目口引坐 田部大嶋宗小斗 四村 口引座

  端銚  
引坐又丸桁一枝



とであり、全体の32%を占める。平城宮瓦第Ⅱ期の大部分は6663型式であり、これに6664・6685型式が加わり、全体の56%を占める。平城宮瓦第Ⅲ期の軒平瓦としては6691・6732・6721・6689型式があり、10%を占める。平城宮瓦第Ⅳ期のものとしては6801型式が2点あるにすぎない。

#### 土器類

奈良時代の遺構にともなう土器類は、SD3715・SE8407・SB8370・SK8412・SB3765などから出土した。井戸SE8407からはまとまりのある土器が出土した。井戸廃絶時の埋土からは平城宮土器Ⅴ（780年頃）の土器が出土し、井戸自体の堆積土中には平城宮土器Ⅲ（750年頃）の特徴をもつ一段放射暗文のある土師器杯Bがある。SB8370の柱掘形からは平城宮土器Ⅴの土師器皿Aが出土しており、建設の年代が推測できる。上壇SK8412からは平城宮土器Ⅳ（765年頃）に属する土師器椀Aが出土した。大溝SD3765出土の土器は各種の器形をふくみ、奈良時代当初の土器群を構成している。

そのほかの土製品としては、蓋や杯を転用した甕、土錘、フイゴの羽口、漆付着の土器、灰釉陶、白磁などがあるが、多くは整地層などに包含している。

#### 木製品

木製品の大半は大溝SD3715から出土した。多くは板状品、棒状品などの原形が不明のものである。製品として確認できるものとしては、人形1、匙1、車輪部材1、箸12、付札7、篋11、円板5、形代1があり、奈良時代における古い様式をよく伝えている。

### 3 おわりに

今回の発掘区の北方に展開する推定第1次内裏地域については主要部分の調査を終了し、おおよその状況が判明している。その成果に今回の発掘調査成果を照合してみよう。

推定第1次内裏地域の遺構はA・B・Cの3期に大別されている。いまのとこ

ろA期は和銅から天平勝宝以前（4小期にわかれる）、B期は天平宝字～宝亀初年、C期は宝亀年間から天長年間と理解している。以下、内裏A期、B期とよび、今回のA～D期と区別する。

#### A期

和銅創建当初の短期間の遺構である。つまり、造営開始に伴って一時的に設けられたもので、溝SD8373に挟まれる部分は仮設道路のようなものであろう。溝SD8372が平城宮の南北2等分線に一致することから、造営時における地割計画の痕跡として理解することができる。この道路の西方に平城宮を東西に2分する下ツ道があり、これら2条の遺構が平城宮地割の基線になる可能性がよい。

#### B期

内裏A<sub>1</sub>期に相当する。従来の見解では、大溝SD3765の所在のみが知られていたが、東面を画する塀SA8410の発見は新知見である。ただ、この塀はいまのところ孤立しており、性格を明らかにしえない。

#### C期

内裏A<sub>2</sub>期に相当する。大溝SD3765が東へ移動して、大溝SD3715を新に開鑿する。そして、推定第1次朝堂院地区の東面を塀SA5550Aによって区画する。今回の調査ではこの期に属する朝堂相当の建物は検出していない。

#### D期

D期の開始は内裏A<sub>3</sub>期に相当する。塀SA5550Aを築地SA5550Bに改作し、そのなかに基壇建物SB8400を建造する。この建物を「朝堂」の建物に比定するのであるが、規模や存続期間については不明瞭の部分があり、今後の調査に期待したい。いずれにせよ、この段階で推定第1次朝堂院地域は一応建設を完了する。

D期以降については、基本的な変化はなく、平城宮の廃絶時まで存続するようである。ただ部分的な改修は行われている。築地SA5550Bから塀SA5550Cへの建替が中心をなす改築である。また、奈良時代末期には各所に小規模な建物がつくられる。

今回の調査成果のうち、神亀～天平初年の造宮資料そえたことは重要である。これまで、推定第2次内裏北外郭にある土壌SK2102出土の木簡によって造宮の行われていたことが推定されてきたが、今回の木簡はさらにそれを補強する資料である。

文献上、この時期の記録は不鮮明だが、知造宮事や催造宮長官が設置されていることは注目すべきことである。すなわち、中納言藤原武智麻呂は養老5年9月造宮卿に任ぜられ、さらに神亀元年から4年まで知造宮事であった（家伝・公卿補任）。また、天平4年に中納言阿倍広庭は催造宮長官であった（続日本紀）。こうしたことは、この時期の造宮がきわめて大規模であったことを示す有力な手掛りになるであろう。

木簡にあらわれる「東高殿・西高殿」の具体的な位置をしることは困難であるが、殿舎名を記録するものとして重要である。



第3図 塋SA8410と溝SD3715、会所SX8411（南から）

## II 東院園池と周辺の調査（第99次）

平城宮跡第99次発掘調査は、東院地区東南隅にある園池跡を中心とする地域（6ALF-J・K・E・D地区）で行った。1967年度に行った第44次調査で、東院をめぐる大垣およびその内側に展開する園池跡の一部を発見した。今回の調査はこの園池の規模を明らかにするとともに、北方に向けて次第に高まる地形のもとで、東面大垣および外濠がどのように遺存しているかを確かめることを目的とした。

発掘調査は1976年7月26日に開始したが、諸般の事情から8月19日に一応中止するに至った。その後、10月6日から発掘を再開し、1977年1月17日に調査を終了した。

発掘地域は北方から舌状にのびる台地が、沖積地に移行する部分にあたり、地山は砂地で軟弱であり、地下水位がきわめて高い。以下園池地区（6ALF-J・K地区）と大垣地区（6ALF-E・D・H地区）にわけて説明を行う。

### A 園池地区(6ALF-J・K)

園池は上・下二層にわかれ、大規模な改修を受けている。発掘にあたっては、まづ上層遺構を検出し、その後上層池のバラスの大部分を除去し、下層園池の全貌を明らかにした。このことから、遺構は大きくA・Bの2時期にわかれ、B期はさらに2小期に細分することができた。

#### 1 A期遺構

A期の遺構としては、園池SG5800Aを中心に、掘込地業建物、石組溝がみとめられる。

園池SG5800Aは、上層園池SG5800Bの下部にのこっていた。この池は大垣に沿って鏡手に屈曲してひろがり、東岸と北岸の汀線を確認するとともに西岸の一部も検出した。第44次調査で検出した南岸から測ると、南北最大長約60mとなり、東西最大幅約45.2mとなる。

池の入江や岬は上層池によって破壊されている部分が多いが、大体の状況はたどることができる。東岸に岬2（SX8450、SX8452）と入江2がある。西岸には岬2、入江5がある。東岸の南半部分を除いて、周縁の池底に石敷が残存する。それは径30cm前後の扁平な安山岩を2～6m幅で、地山の直上に敷きつめる。池の中心部分の底には石敷がみられず、細かい砂利を敷きつめている。地面から池に移行する岸辺は、地山を急斜面に掘りこみ人頭大の安山岩を積みあげた部分（西岸北方）とゆるやかな斜面に拳大の円礫を葺く部分とがある。こうした池は余り深くなく、現状では深さは50cm内外におさまる。

掘込地業建物SB8480は、下層園池の西岸が鍵手に屈曲し、半島状に張り出す部分につくる。遺構は東西に長い口字形の掘込地業である。幅2.5～3m、深さ1.5mの掘形を南北1.5m、東西7.5mの範囲にめぐらす。掘形の底には人頭大の石を多数投げ入れ、その上で青灰色粘土と砂とを交互に積み固めている。礎石の存在を示す根石などは残っていない。このような掘込地業の上をB期の整地土（茶褐色粘土層）が覆っており、この建物の基壇はB期の改修時に徹底的に破壊されたことがわかる。なお、建物としては桁行3間、梁間2間程度のものが想定できる。

石組溝SD8456は下層園池の東北隅に流入する南北方向の溝である。幅1m内外の掘形を掘り、底に扁平な石を敷き側石を立てたようだが、側石はすでに抜きとられている。SG5800Aに北方から水を供給する施設である。

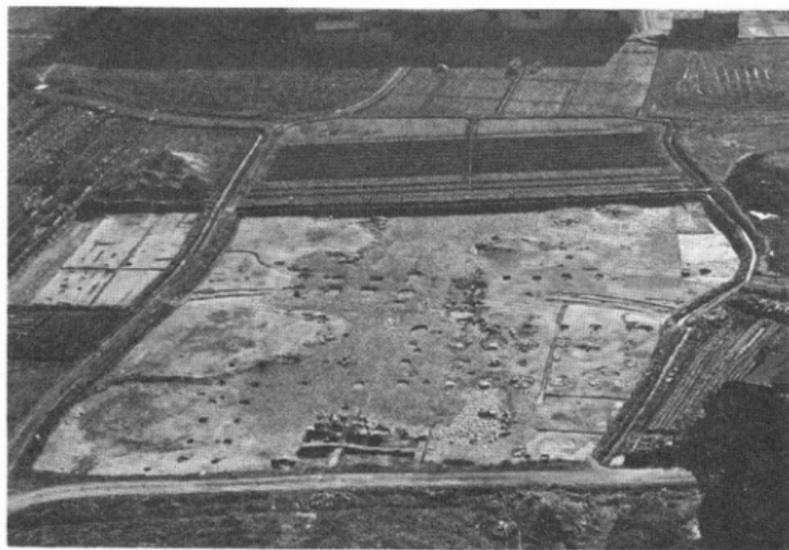
## 2 B期遺構

B期の遺構としては、園池SG5800Bを中心に礎石建物1、柱間2、扉1、掘立柱建物1、棧敷1、渡廊1、橋1、溝1がある。すでにのべたように、B期は2小期に細分される。

園池SG5800Bは下層園池の上で全面的に改修した園池である。下層の石組や石敷などの施設を取りはずし、底から岸辺にかけて全面に暗灰色粘土を敷きつめ、そのうえに10cm内外の厚さで玉石を敷いている。池の掘形は下層園池を踏襲するが、東北隅を東方にひろげてほぼ大垣の位置までのぼしている。これは

給水路SD8455を東によせたためであろう。ここには曲物を埋込んだ湧水をとる設備がある(SE8454)。岬や入江の出入は深いが、池底を埋立てたため水深30cm内外の浅い池となる。東岸に岬2(SX8450、SX8452)が突出し、大きな縦状片麻岩や安山岩の石組痕跡がある。西岸屈曲部は半島状に突出し、先端に石組痕跡をとどめる(SX8459)。北岸中央部にはほぼ原形をとどめる石組の築山がある(SX8457)。この石組は大きく、最大径1m前後の安山岩や片麻岩の岩石を樹てならべている。第44次調査で南半を確認している中島の北半部を発掘区の西南隅で検出した。やはり汀線に玉石をしき、片麻岩の石組痕跡がある。

礎石建物SB8470は園池の西岸にあり、東の部分を池中に没する東西棟礎石建物である。その規模は桁行5間(15m)、梁間2間(6m)、柱間寸法はともに3m(10尺)等間である。柱位置の多くは根石によってくるが、池中に



第4図 園池SG5800 B(北から)



没する東妻柱などには三笠安山岩を用いた5個の礎石を残す。棟通りの東から2間分には小礎石と根石があり、床張りであったことがわかる。付近から松皮や瓦が出土しており、松皮葺で棟に瓦をのせた屋根を想定しうる。東妻から東西2間(3.6m)、南北2間(6m)の掘立柱がのびる。柱穴が小さくかつ浅いので、棧敷のごときものを付設したのであろうか(SB8471)。

柱囲いSA8467・SA8468は礎石建物の前面に建つ。SA8467は北、SA8468は南にあり、ともに東西5間(15m)の掘立柱列。おのおのの東西両端柱の内寄り1.5mの位置に大型掘立柱を建てる。柱根はすべて八角形である。一般には径24cm程度だが、四隅内寄柱は径56cmと大きく、横木を挿入した根がらみ痕跡がある(後述の建物SB8466の礎板として大型柱根が転用されていた。一方、建物SB8466から凝灰岩の八角柱根巻石や面取りのある板石が発見されており、柱囲内の地面が切石によって舗装されていたことが想定できる。大型柱の性格は明らかでないが、鳥居のごときものかもしれない。

以上の遺構がB期のなかでも古い時期(B<sub>1</sub>期)に比定しうるものである。つきにB期のなかでも後に改修された遺構(B<sub>2</sub>期)についてのべよう。

塀SA8469は、柱囲いSA8467、SA8468のうち西方の大型柱を撤去したあと、西面の囲いを外へひろげたものである。すなわち、1.5m西へ伸ばした位置に、4間(1.5m+3m+3m+1.5m)の掘立柱塀を増築する。

建物SB8466は柱囲いSA8467、SA8468の東の池中に浮ぶ。この遺構も東方の大型柱を撤去したのちにつくるが、構造がやや複雑である。すなわち、柱囲いの東端の柱を利用して南北4間(9m)、東西3間(6.3m)の総柱をたてる。この遺構が、床のみの棧敷様のものか屋根をもつのか明らかでないが、柱間隔が変則的なことや柱囲い広場の池中への拡張ということを考慮して前者を想定したい。南北の柱列を結ぶ西側の柱列にそって溜木を利用した杭(SX8486)があり、西岸の護岸がこのあたりにあったことを示す。西から2列目の柱列は西方のSA8469と対称位置にあり、この柱列のみは高さを柱囲いに揃えている可能性がある。東側の柱列のうち、南の柱間が広いのは渡廊SC8465とつな

ぐためであろう。

渡廊SC8465は建物SB8466の東南隅と池の東岸を結ぶ、幅1間(2.4m)で長さは3間(10.8m)である。

以上がB2期の遺構だが、池の東北隅で南北に架ける橋については時期を決めがたい。この橋は長さ6間(13.5m)、幅1間(3m)の掘立柱の橋脚である。

### 3 遺物

園池SG5800A・Bを中心に多量の土器、瓦類、木製品、自然木、種子などが出土した。とくに上層園池からの出土量が多い。

#### 木 簡

礎石建物(SB8470)の東妻柱付近における上層園池の堆積土層から付札2点が出土した。それは布の給付に関するものか、「貞雄方一丈」、「忠安方二丈」とかく。同じく上層園池東北隅砂浜にある遺物堆積土中から、「第十五横」とかく付札が出土している。

#### 瓦 類

軒平瓦100点、軒丸瓦96点、鬼瓦2点、面戸瓦1点、縁袖平瓦2点、水波文埴1点、埴類などと多数の丸平瓦が出土した。

平城宮瓦Ⅰ期(和銅～養老年間)の瓦は、軒丸瓦5点にとどまる。Ⅱ期(養老～天平年間)の瓦としては軒丸瓦24点(全体の34.2%)、軒平瓦23点(44.0%)があり、出土量の大半を占める。それらのうち6225、6308、6663、6681型式が多数を占める。Ⅲ期(天平勝宝年間)の軒瓦は、軒丸瓦19点と軒平瓦13点とであり、6282、6133、6296、6721、6691、6689型式で構成している。Ⅳ期(天平宝字～神護慶雲年間)の瓦には6760、6801型式などがあるが、少量である。

鬼瓦のうち1点は建物SB8466の南側柱の礎板に転したものの。押熊瓦窯跡



第6図 SB8466出土鬼瓦

出土の鬼瓦に類似し、Ⅱ期に属する。他の1点は礎石建物SB8470の東南隅柱付近から出土した。

下層園池の底（灰色砂面）からは6225、6663、6668型式が出土しており、すべてⅡ期に属する。上層園池のバラス敷からはⅡ期瓦とともに6282、6133、6296、6721、6691A型式などⅢ期の瓦が出土した。上層園池の堆積上からは、Ⅱ・Ⅲ期瓦とともにⅤ期の6760、6801型式の瓦が出土した。

このような状況から、A期の掘込地業建物（SB8471）には平城宮瓦Ⅱ期の瓦を葺いていたことが想定できる。B期の建物はⅡ、Ⅳ期の瓦を混用するが、Ⅲ期の瓦を主体としていたことがうかがえる。

## 土器

土師器、須恵器、施釉陶器とともに、磁器や瓦器が出土した。

施釉陶器 上層園池の西岸の礎石建物付近の堆積土や整地土層から集中的に出土した。緑釉陶器としては香炉蓋、三足盤、皿など10点がある。灰釉陶器は皿、杯、三足盤、瓶などの20点である。いずれも平安時代初期の型式にぞくする。

黒色土器 量的に少ない。小型壺、三足盤、杯、皿、風字硯などが出土した。いずれも上層園池の堆積土からの出土で、施釉陶器と同時期である。

土師器、須恵器 上層園池の堆積上から多量の平城宮土器Ⅵ（825年頃）にぞくする土師器、須恵器が出土した。それらは東西の岸辺でかたまって発見された。なかに墨書するものがあり、判読できるものに「藏人□」、「宮」、「□道」<sup>〔所か〕</sup>、「…為鶴在……応□」、「土□」<sup>〔義か〕</sup>、「…瓦…」などがある。

下層園池には少量ではあるが、平城宮土器Ⅲ（750年頃）の土師器・須恵器がともなっていた。

## 木製品

木製品や建築部材など238点が出土している。いずれも上層園池にともなうもの。

建築部材としては柱囲い（SA8467、SA8468）の大型柱の八角形柱、

根がらみ材、榎太、榎などがある。上層園池の堆積土から出土した斗形の甕形は注目すべきもので、八角円堂の部材であり、第44次調査で発見した八角円堂との関係が想定できる。また東岸の付近からは栓皮の出土が顕著であった。

木製品には挽物円盆、薺、高杯、曲物、杓子、篋、箸、漆器薺、布巻き軸、杵形、下駄、削り掛けなどがある。いずれも上層園池にともなう。

#### 金属製品ほか

上層園池にともなって、鉄釘、鉄鎌、銅留金具、和銅開珎、神功開室などが出土した。また、砥石や紡錘もあった。

#### 植物遺体

上層園池の堆積土層には多くの種子や木葉があった。内容はマツ類の球果、モモ、クルミ、ウメ、ヒシ、アラカシ、センダン、アシ、ミクリなどの種子とアラカシの葉であった。ほかに水草も多い。

## B 東面大垣地区(6ALF-E・D・H)

園池地区の東側は、東面大垣に比定されている里道が一段高くのこり、外側に坊間路の幅をたどりうる約30m幅の水田が南北につらなる。外濠の推定線で史跡指定がなされているため、調査範囲は水田の半分に限られた。

### 1 遺構

検出した主な遺構には、築地大垣、同東雨落溝、東面外濠、暗渠、塀、掘立柱建物などがある。

築地大垣SA5900は、第44次調査で確認した南端から、113.0m北方まで調査したことになる。E区ではすでに削平されていたが、H区では基底がよく保存されている。築地本体は道路敷のため幅員などを全体にわたって明らかにしえなかった。築地は後述する東雨落溝のあたりから掘込地業を行い、本体は版築でかためる。築地本体の幅は約3mである。

大垣東雨落溝SD5815は、築地の端から東へ約1.5mをへだてて南北にのびる。幅70～110cm、深さ40cm程度で、砂質土が堆積する。H・D区では両

側を丸平瓦で護岸している。

暗渠SD8436は、H区において築地下を流れて宮外の外濠SD5780に排水する暗渠である。暗渠は幅1.2m、深さ50cmの掘形をおよそ東雨落溝を横断するあたりまで掘りこみ、そのなかにヒノキの板材で組上げる。現在蓋板をとどめないが築地本体にあたる部分は、凝灰岩切石で補強する。東雨落溝と外濠との間にある埴地の間は素掘りの開渠となる。なお、外濠が埋立てられたのちは、流路を南に変えている。

東面外濠SD5780は、東雨落溝から幅約5mの掘削をへだてて南流する大溝であり、二坊坊間路の西側溝でもある。溝の幅員は6m内外、深さ60cm内外で、護岸の施設などはない。E・D区では細かい砂が主として堆積するが、H区では粘質土が堆積し多くの遺物を含んでいる。H区の南端の暗渠SD8436の流入する部分は一種の凹みを呈し、多量の木筒が出土した。木筒のなかに天平末年の年紀をとどめるものがあり、廢絶時の1点をしることができる。また、外濠の堆積はこの下にもあり、そこからは平城宮土器Ⅱが出土する。

H区の外濠は奈良時代の後期に埋立てられ、埴地から外濠の直上にかけて柱穴がある。

## 2 遺物

遺物は主としてH地区から出土し、E・D地区からの出土量は少ない。

### 木筒

165点の木筒と414点の同削片が出土した。それらはすべて外濠からの発見であり、なかでもH区の出土量が多い。その内容は、平城宮内の食料関係を扱う官司の文書類に集中しており、一括遺物としての性格をもつ。また天平15、18、19、20年の年紀がある。そうした木筒のなかに「東籩」と記するものがあり、岡池地区を東籩に比定しうるかもしれない。

### 土器

多量の土師器と須恵器のほか、少量の灰釉陶器、青磁、墨書土器がある。外濠の下層から平城宮土器Ⅱ(730年頃)が多量に出土しており、外濠の存続年代

をすることができる。墨書土器としては「宮」、「佐良 酒環」と記すものがある。

施釉陶器としては、緑釉皿、灰釉皿が整地土から出土している。

#### 瓦埴類

瓦類は、大垣に葺いたものとみられ、軒平瓦69点、軒丸瓦92点が出土した。主なものは平城宮瓦Ⅱ期の瓦で、6308、6225型式などの軒丸40点(43.5%)、軒平瓦32点(46.4%)である。Ⅲ期に属する6282、6133、6721型式は、軒丸瓦21点、軒平瓦29点である。Ⅳ期以降の瓦は少なく、6138、6760型式が各3点出土したにとどまる。こうした瓦の多くはH区の瓦溜SK8441から出土した。

#### 木製品

外溝などから、糸わく、槽、曲物、杓子、砧状厚板、櫛、人形、木釘、漆塗皮製品、円座、むしろなどが出土した。

### C おわりに

先年からの第39・44次調査などによって、東院が奈良時代前年(天平初年)にはすでに造営されていることが明らかである。今回の調査でも、東面大垣の所用瓦、外濠下層出土の土器などの年代は、さきの推定と矛盾しない。もちろん、6ALF-H地区の外濠にかぎれば、奈良時代の後半に埋められ小路からの導水を容易にしたことがうかがわれる。

大垣内に形成する園池遺構の造営年代を決める手掛りをえることはできなかったが、これに先行する奈良時代の遺構は存在せず、東院の成立当初から園池として計画されていた可能性が大きい。下層園池は破壊されている部分が多いが、ほぼ輪郭をたどることができる。岸辺に沿って扁平な石を敷きつめるなどの技法は、前年度に発掘した左京三条二坊六坪の北宮園池と類似しているが、その縁辺に玉石を堅にならべるなどの技法はみられない。北宮園池よりも作庭の時期が下るためであろう。この園池は西岸に建つ基壇建物から觀賞するのであろうが、ここに至るまでの道路などの施設については今後の調査にまたなければならない。

上層隔池への改修は出土遺物によって天平勝宝年間に想定しうる。この隔池は、岸や底を玉石やパラスで敷きつめるため、下層園池とはかなり趣きをことにしている。石組の中心を北岸の中央におき、西岸につくる礎石建物、柱囲いなどが主殿になっている。さきに調査した東南隅にある八角円堂とは柱を八角形につくるなどの共通点があり、一貫した様式の建物で揃えていたことが推測される。その後、池中に棧敷状の舞台をつくり、渡廊をへて東岸にわたる施設が増置されるが、その基本構造は変化していない。

こうした上層池は、平安時代まで存続する。最終段階の遺物として施釉陶や木器の食器類が、主要殿舎であるSB8470付近に集中し、一般の土師器や須恵器が東岸北部に集中していることは、利用状況をしる一つの手掛りとなる。

### Ⅲ 佐紀池の調査（第101次）

第101次調査は佐紀池において行った。佐紀池は、平城宮の西北部にある東西160m、南北150mの逆L字形を呈する池である。今般この池の北部にこの民有地について、現状変更の申請があり、文化庁文化財保護部の指示にもとずき、その可否をきめるべきの事前の発掘調査を行った。

調査地区は6ACA-W・S地区と6ACB地区におよぶ。1977年1月7日から調査を開始し、3月25日に終了した。

佐紀池は明治17年にそれまで水田であった当地域の南側、つまり現在の一条通りの線上に築堤してつくる新しい池である。佐紀池の北方には御前池、下吉田池、上吉田池が連なり、平城宮造営以前には奈良山南麓の谷筋であったことが想定されている。第92次調査では、一条通りの南側で、奈良時代の池の南岸および排水口を発見し、佐紀池一帯が奈良時代平城宮の園池である手掛りをえた。

今回の調査では、奈良時代の園池が佐紀池北端まで続いていること、および、その規模が現在の佐紀池とほぼ等しいことが明らかとなった。また、堰をもった古墳時代の溝も検出され、当地域の古墳時代を知る上で成果があったが、とりわけ、従来この地域では未発見であった縄文式土器を検出したことも看過しえない成果であった。

#### 1 遺構

佐紀池北端部の池底およびこれに東接する水田に南北幅15m、東西長67mの東西トレンチを設定し、さらに、東西トレンチの東南約30mの地点の池底に旧園池汀線と思われる段差があるため、ここに東西幅6m、南北長26mの南北トレンチを設定した。

東西トレンチでは、浅い所で現地表下10cm、深い所で現地表下約2mに遺構面があり、この面で奈良時代の園池と溝、古墳時代の溝と土壌を検出した。

南北トレンチでは、北から南へゆるやかに傾斜する現地表下約40cmに遺構面があり、奈良時代の園池と溝、古墳時代の溝を検出した。

#### a 奈良時代の遺構

奈良時代の遺構には、園池SG8500、溝SD8501、溝SD8502がある。

園池8500は、東西トレンチで東西両岸を、南北トレンチで北岸を検出した。西岸は直線的で真南北に走る。東岸は西岸に比べて曲折があるが、大勢として北で西へ約45度ふれる角度で走っている。そのため、園池の東西幅はトレンチ北壁で43m、トレンチ南壁で55mと、北で狭く南で広がっている。北岸は、東岸が南へのびて東折する延長線上にあり、東西に走っている。

岸はいずれも傾斜角約10度のきわめてゆるやかなもので、斜面にはこぶし大の小礫を敷きつめている。敷石がもっとも良く残っている東岸の場合には、粘土質の斜面ベースに幅約2mで礫がしきつめられていた。西岸と北岸の場合には敷石の残りが悪く、とくに西岸では痕跡程度に小礫が点在する程度であったが、当初は東岸と同様に密に敷石があったものと考えられる。また、東岸では敷石の東側の岸上に大小の自然石が点々と配されており、これによって多少とも園池としての景観を整えていたものであろう。北岸北の岸上には直径10～30cmの不整形の石抜穴が密に接する部分があり、ここでは石を並べていた可能性が強い。

東西両岸にはさまれた池底は、南北方向では若干南へ下るに対し、東西方向ではほとんど水平である。池底には厚さ1cm以下の薄い砂の堆積層があり、砂層の上に厚さ約50cmの植物腐食層がある。植物腐食層から、奈良時代から平安時代初期に至る土器類とともに、瓦埴類、木製品、木簡、金属器、貨幣が出土した。

溝SD8501は東西トレンチ中央部の池底を南北に走る素掘りの溝である。幅約40cm、深さ約20cmの断面U字形の小さな溝で、溝中から木簡と須恵器が出土した。

溝SD8502は南北トレンチ中央部を東西に走る幅約50cm、深さ10cmの浅い素掘りの溝で、溝中から土師器と須恵器が出土した。溝SD8502の埋土の上には灰白色の砂層が広がっており、この砂層から炭や焼けた木片多数とともに土師器、須恵器が出土した。この部分は園池池底にあたり、濁水時にここで火

を焚いたことがあったようである。

#### b 奈良時代以前の遺構

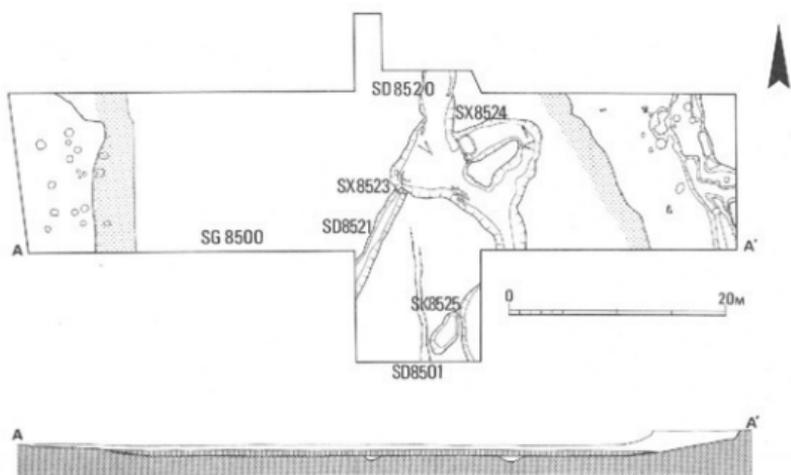
奈良時代以前の遺構には、溝SD8520、SD8521、SD8526、SD8527、SD8523、堰SX8523、SX8524、土壌SK8525がある。これらの遺構はすべて圃池SG8500の池底面で検出された。なお、SD8519は近世の溝である。

溝SD8520は、東西トレンチ中央部を北から南へ蛇行しながら流れる、幅約3m、深さ約60cmの溝で、途中で2つに分流したのち、また合流する。分流の始点に堰SX8524がある。溝には茶色の有機物腐食層、灰白色の砂層、黒色の粘土層が互層となって堆積しており、各層から土器、木器、金属器、植物の果実と葉、昆虫遺体が出土した。出土した土器類のほとんどは布留式の土師器で、庄内式の土師器、後期弥生式土器を少量含んでいる。ただ、溝最下層から布留式の土師器が出上し、整然とした時期的堆積層序を示していない。

堰SX8524は、溝SD8520の分流の始点に設けられた堰である。幅3mの分流の川幅いっばいに矢板を南北一列に打ち込み、南端では大きな自然木の根を矢板で打ちつけて固定し、堰の部材として利用している。矢板は幅10～15m、厚さ約5cmの榿の板材で、先端を尖している。

溝SD8521は、蛇行する溝SD8520の西南岸にとりつく幅1.5m、深さ50cmのV字形に近い断面をした溝で、西南から北東へ直線的に流れてSD8520に合流する。溝には上下2層の堆積があり、下層は小石を含んだ灰黒色の砂層、上層は黒色の粘土と有機物の混った層である。上層から布留式の土師器が出土した。

堰SX8523は、SD8521がSD8520にとりつく地点から南約40cmに作られた堰である。溝幅いっばいに直径約6cmの丸太を一列に打ち込んだもので、丸太の先端は尖っている。SX8523の北30cmの地点にはこれと平行する堰があったらしく、直径5～6cmの円形のピットが一列に並んでいる。SX8523の前身の堰であろう。



第6図 第101次調査遺構図



第7図 第101次調査位置図



第8図 第101次調査遺構、上は奈良時代池の  
汀線、下は古墳時代木器の出土状況

溝SD8526とSD8527は南北トレンチで検出した素掘りの東西溝である。遺物は出土しなかったが、層位的には奈良時代以前のものである。

土壌SK8525は、東西トレンチ両端で溝SD8520の西に接する楕円形の土壌である。短径1.7m、長径3m、深さ60cmで、有機物を含む黒色の粘土が堆積していた。遺物はないが、古墳時代ないし弥生時代のもと考えられる。

## II 遺物

今回の調査では、縄文式土器から近世に至るまでの各種の遺物を得たが、ここでは竈池SG8500と古墳時代溝SD8520出土の遺物、縄文式土器を中心に報告する。

### a SG8500出土の遺物

#### 1 瓦埴類

SG8500堆積層から、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、葺などの瓦埴類が少量出土した。このうち軒丸瓦は、6282型式1点、6225型式1点、6314型式2点、6134-B型式1点、型式不明4点の計9点である。軒平瓦は、6663-C型式1点、6682型式1点、6642型式1点、6779型式1点の計4点である。

#### 土器類

SG8500から土師器、須恵器が出土した。出土量も少なく、また大部分が小破片であるが、年代のわかる最も古いものには神亀年間頃と推定される須恵器蓋Aがあり、最も時期の下るものには9世紀中頃の土師器杯Aがある。

墨書土器ではほぼ完形に近いものが1点ある。天平末年頃に編年できる土師器皿AIで、底部外面中央に「天平十八年」の紀年があり、内面には土器の器名と数量を記している。辛櫃に納めた容器の品目と数量を記したものであろう。

#### 墨書土器釈文

	高佐良九	〇
	佐良八	佐良卅
	毛比卅	毛比卅
(内面)・二辛	鏡形卅	片貞利廿
	〇都支二〇	匏五納
	土高佐良一	

(外面)・天平十八年潤九月廿七日[ ]

#### 木簡

木簡は2点ある。1点は習書風のもので、多数文字があるうち、「小」のみが判読できる。もう1点は文様風のもので、直線数本どうしを斜格子風に組み合わせたものである。

#### 木製品

木製品には、下駄2点、刳物破片2点、器底板2枚、曲物底板5点、削り掛け2点などがある。他に中世に下ると思われる外面に朱文をもった黒漆椀が1点、S G 8 5 0 0 から上の層から出土している。

#### 金属製品

金属製品には鉄鎌1点があり、貨幣では神功開宝が1点出土している。

#### b S D 8 5 2 0 出土の遺物

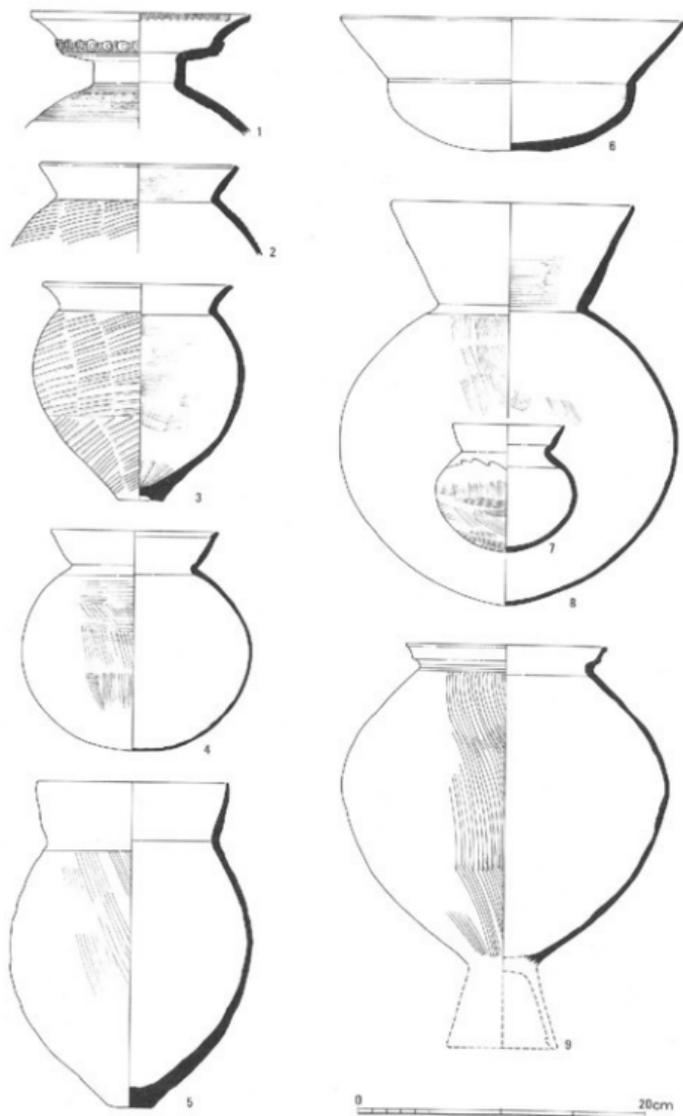
#### 土器類

S D 8 5 2 0 出土の土器のほとんどは布留式に属する土師器で、甕、壺、小形丸底壺、高杯、鉢があり、甕の中にはいわゆるS字状口縁をもつものが少数ある。他に庄内式に属する土師器甕・壺、後期弥生式土器の甕が少数ある。

#### 木製品

木製品には鋤、きぬた、ちきり、梯子、台板状木製品があり、他に建築部材と推定される板状品もある。また、木製品ではないが、瓢箪も1点出土している。

鋤にはスコップ形の柄身共づくりのものと、なすび形の着柄鋤とがある。前者にはほぼ完形に近いもの2点、身の先端部破片2点があり、後者には完形品1点、破片1点がある。なすび形の鋤は長さ85cmの長大なもので、形式的には庄内式の時期に属すると推定される。きぬたは2点とも柄の先端にもどりのある形式である。ちきりは2点、梯子は1点でともに破片である。台板状木製品は平らな板の下面に断面台形の太く短い脚を2本、下駄の歯状に削り出したものである。以上がS D 8 5 2 0 出土の木製品だが、完形品の多いこと、未成品のないことが特徴的である。



第9図 第101次調査出土古墳時代土師器

SD8520南岸の斜面から、小形の素文鏡が1点出土した。直径2.8cm、厚さ0.5mmの薄手、小形のもので、鏡背に紐がつく。白銅色を呈し、錆もない。X線放射化分析では、錫に比して鉛が多いことが知られ、成分的には日本製の三角縁神獸鏡と近いことが指摘できる。

#### 縄文式土器

東西トレンチで、土層観察のためにSG8500の池底を部分的に掘り下げた時に、出土した。SG8500のベースは灰白色の粘土で、粘土の下は砂とガラスが堆積しており、このガラス層から出土したものである。

総数12点で、いずれも小片であり、器面の荒れが激しいが、器種のわかるものに鉢形土器があり、総じて縄文時代中期に属するものである。

#### Ⅲ ま と め

今回の調査によって佐紀池北端部に奈良時代の園池があったことが明らかとなったが、調査面積が少ないこともあって、今回の調査結果だけからは園池の全体的規模は知り難い。しかし、佐紀池の東の水田地域については、第2次調査、第81次調査が行なわれ、佐紀池の南側では第92次調査がある。こうした発掘調査以外にも、平城宮造営以前の旧地形の研究もなされており、明治14年の地籍図や現在に残る遺存地割などを含めて、園池の規模をかんがえてみたい。

a 平城宮造営以前の当地域は、北から南へのびる奈良山丘陵の谷筋にあたる。第2次調査において、佐紀池東岸までの地域が埋立てられていることが明かにされている。推定第一次内裏地域の調査の進展にともない、和銅当初にはこの地域が形成されており、池形もこのころに整ったとみななければならない。

園池の南岸は、部分的だが第92次調査で検出した。ただし、提を築き水門を設けるのは天平末年頃に比定された。今回の所見からすればもう少し時期が繰上がる可能性がある。

西岸南部では、第98-3次調査がある。その位置は半島状に突出した先端部にあたり、盛土ではなく丘陵の地山であることを確かめた。このあたりは、池底面から3m程度高くなっている。明治14年の地籍図では現在の佐紀池一帯および

道路を隔てた西側の水田がともに「池田」の小字名をもち、両者とも園池内であった可能性を示す。このように考えると両者にはさまれた小台地は半島形となる。

園池の規模についてのべたが、ほぼ現状の池形が奈良時代に存在したことはまちがいない。園池北端の東西幅と現状の御前池南岸幅および高低については段差があり、両者の連結点には堰ないしは築堤を予想せざるをえない。

b つぎに園池SG8510の造営時期にふれよう。御池東岸の盛土造成は第2次調査によって和銅当初とされ、第92次調査の結果と矛盾しない。南面に築堤して整備する時期について第92次調査では天平末年に比定した。しかし今回敷石をおおう植物腐食層から「天平十八年」の墨書土器が出土するとともに、神亀年間の須恵器も発見されているので、天平末年よりも古い時期に護岸がなされていたことは確実である。この地域が和銅創建の推定第一次内裏築地回廊の西に位置していることから、同様にかんがえられる。その後、園池は奈良時代を通じて存続し、平城上皇の後もしばらくは池としての生命を維持しているとかんがえてよからう。

c 東院の園池SG5800や左京三条二坊六坪の園池SG1504と比較すれば、規模が雄大であり、自然地形を巧みに利用している点に大きな相違点があり、その性格も自から異なるものと推察される。

『続日本紀』天平10年の条に「秋七月癸酉。天皇大蔵省に御し相模を覽す。晩頭に転じて西池宮に御す」とある。「西の池の宮」についての記事はこれが唯一であり、詳しくわからない。平城宮の西辺については、第14次調査以降かなり調査したが、園池に見合う遺構はない。園池SG8500は宮の西北にあり、位置的に合致する。以上のようなことから、今回検出した園池は「西池宮」である可能性が高い。

## N 薬師寺西塔の調査

薬師寺の依頼をうけ、1976年7月5日から1976年8月25日まで、西塔基壇および周辺の発掘調査を行った。

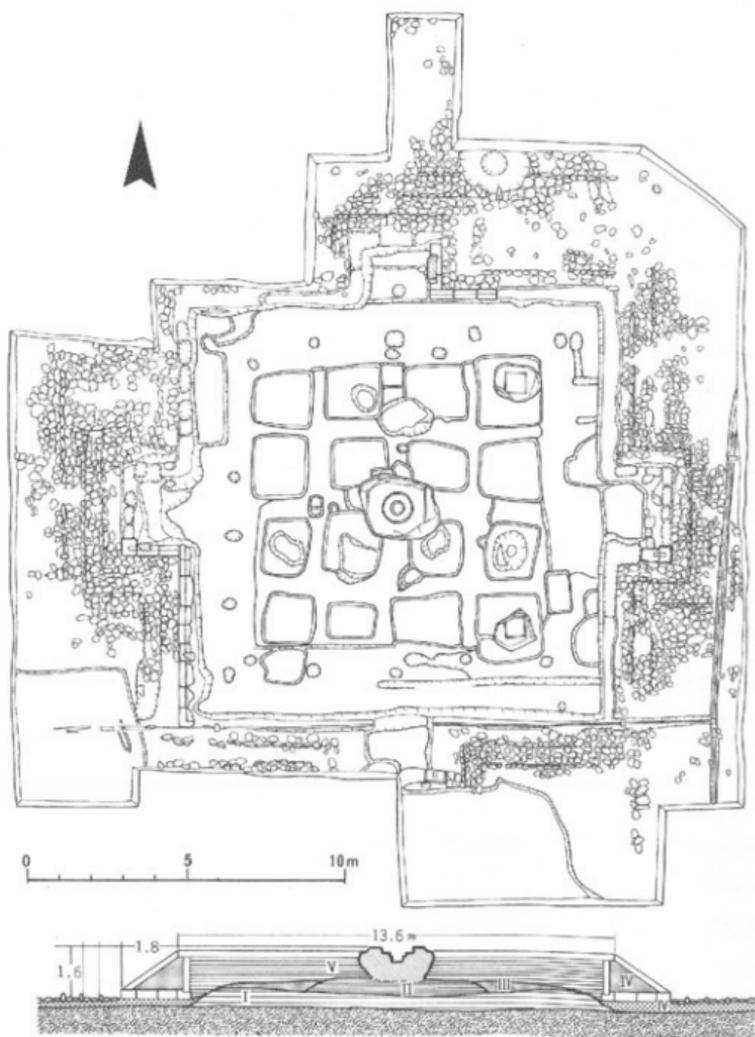
西塔跡については過去2回の調査が行われている。第1回は文殊堂の解体撤去された1934年に、足立康氏によってなされ、塑像片・同開珎・勾玉等をえている。第2回は1969年で、杉山信三氏等によって西面階段が発掘された。

### 1 遺構

基壇は一辺約13.6mの正方形で、復原高は1.4mとなる。四面の中央に幅3mの階段がとりつき、基壇から1.8m出ている。現存基壇の上面から約70cm下までには、焼失時の焼土を含む攪乱土が堆積していた。これを除去して、砂土と粘土の互層で積み固める基壇積土を検出した。残存する3個の礎石のうち、心礎は原位置にあるが、他は移動している。基壇上面では四天柱と母屋柱の礎石を掘えつけた掘形を16個検出した。掘形は一辺約1.5mの方形であるが、すでに根石等の掘えつけ痕跡は検出できなかった。裳層の礎石掘形については四天柱、母屋柱の掘形にくらべて浅いためか、すでに削平されていた。なお、心礎には掘形がないので、心礎のみは基壇築成前に掘えつけていたとみられる。

基壇の築成は掘込み地業を行わず、旧地表面から土を積上げている。築成工程は大まかに4段階に分かれる。第1段階は旧地表に瓦やバラスを敷きつめたのち、粘土とバラ土を互層に比較的細かくつき固める。第2段階は心礎の部分のみに細かい版築を行い、この段階で心礎を掘えつける。第3段階は基壇上面まで大まかに版築し、四天柱等の礎石位置に掘形を掘込み、礎石を掘える。第4段階は各辺の階段部分に土を積み、基壇化粧を行う。

基壇周囲の地覆石はほとんど抜きとられていたが、西面南半部と北面の一部に当初の形で残っていた。石質は花崗石で羽目石をのせる部分は一段低く細工し、基壇内にかくれる部分は自然面をのこす。地覆石の上に立つ羽目石は完全な形をとどめないが、痕跡によって幅60cm、厚さ20cmの切石であることがわかる。



第10図 栗師寺西塔遺構図

羽目石を立てただけで東石をとみなわない古い形式で、先年の発掘調査で確認した金堂基壇の場合と同じである。

基壇の外周は一面の石敷とする。地覆石の外側を60cm幅で犬走りめぐり、その外周に扁平な石を立てて側石とする雨落溝を設ける。また、基壇端から3.5mの位置には、一列にならべた立石（見切り）が方形にめぐる。この立石列は一辺20.6mの正方形をなし、西塔域を画する施設と考えられる。敷石はさらに外方に向ってのび、あるいは回廊内の全域に敷きつめられていたのかもしれない。なお、創建時の石敷面は享禄の焼失時（1528年）にはすでに埋もれていたらしく石敷と焼土面との間には灰黄褐色砂上の自然堆積が介在している。

他の検出遺構としては、発掘区南端にやや時代の降るとみられる池の汀線と、発掘区東辺と基壇南辺にそって、石敷や基壇をこわしてつくる近世の竹筒の上水施設がある。

## 2 遺物

今回出土した遺物は、莫大な量の瓦類のほか、塑像、銭貨、金具、土師器（灯明皿）などがある。

### 塑 像

東西両塔には釈迦八相の群像が安置されていた。八相のうち人胎・受生・受楽・苦行の因相が東塔に、成道・転法輪・涅槃・分舍利の果相が西塔に配置されていた。今回出土した塑像片には頭部、手、胴部、足、袈裟、甲などがあり、なかには如来像、菩薩像と判定しうるものもある。また、彩色や金箔が残っているものもある。胎土は雲母の多い緻密な粘土を用いている。この他、塑像の胎土とは異なる砂粒を多く含んだ破片がある。直線や曲線の凹凸に富む文様があり、白上で彩色されている。これらは諸相の背景となった山岳や巖洞、台座を現わした一部であろう。

### 瓦 類

軒瓦約800点と丸・平瓦が焼土混り褐色上層から出土した。軒瓦は焼失時に近い室町・鎌倉時代のもが多く、本薬師寺式や奈良時代のもは一部にもみ

ない。焼失する頃までに、創建時の瓦はほとんど葺替えられていたのであろう。

#### 金属製品

極先飾り金具、厚板、塑像芯銅線、紙、带状留め金具などの青銅器が出土した。青銅厚板には「第二□」と陰刻したものがあり、相輪の一部とも考えられる。銭貨には和銅開珎2枚のほか、淳祐元宝、祥符元宝、景德元宝、寛永通宝などがある。ほかに釘、カスガイ、座金具などの鉄製品が多い。

#### 土器

土器類はきわめて少量であり、焼土層と灰黄褐色砂土から須恵器の小片と灯明皿が若干出土したにすぎない。



第11図 薬師寺西塔基壇（西から）

## V 法華寺周辺の小規模調査

本年度も法華寺旧境内およびその周辺で数次にわたる小規模な発掘調査を行った。それらは建物の増改築などを契機に発掘したもので、面積は少ない。ここではその主なものを選んで報告しておく。

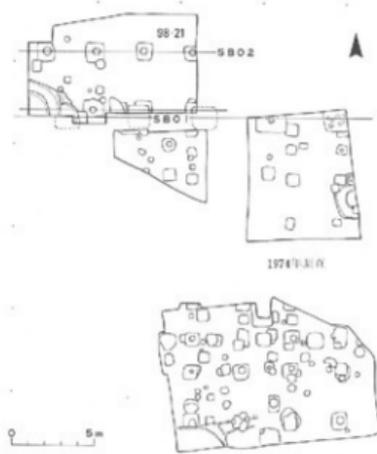
**金堂周辺の発掘 1 (第98-4)** 6月には先年、遺構の一部を検出した金堂の東南部で調査した。建物改築予定地で、東西3m、南北5mのトレンチを設定した。土層は上から黒灰色土、黄褐色砂質土、暗灰褐色粘質土、淡褐色粘質土(地山)であり、第3層で遺構を検出した。柱穴や土壇のうち、柱穴は各1間ずつで時期を異にする3棟分であるが、小面積のため、性格を明らかにしえなかった。

**金堂周辺の発掘 2 (第98-21)** 2月から3月にかけては、金堂の一部とおもわれる遺構を検出した。当調査区の東南に接した地域において1974年に発掘が行われ、創建の法華寺金堂と推定される建物SB01の南側1間分のほか、4期以上にわたって重複する建物遺構を検出している。

今回の調査地区は法華寺の南北中軸線上にあり、前回検出した推定金堂南側柱の西延長部と、入側柱の検出が予想された。

遺構の検出は20cm~40cmの肥土層を取除いて、黄褐色粘質土地山層の遺構面で行なう。発掘区西南部は他より30cm高く遺存していたが、これは旧水田面の段差を示している。

検出した遺構は建物2棟SB01、SB02と中世の井戸状遺構



第12図 第98-21次調査遺構図

および小柱穴8である。SB01は発掘区南端に検出した東西2間分の掘立柱列で、前回調査した金堂南側柱に続く。柱間14尺で、前回と合せて4間分を確認した。しかし、当初予想した入側柱は痕跡を残していない。現本堂下とその東に検出した建物遺構では礎石と掘立柱を混用していることから考えると、当建物の入側柱は礎石建であった可能性も充分ある。

SB02は東西3間10尺等間、南北1間12尺間で、南側の柱はSB01と重複して、これより新しい。西南隅の柱穴は井戸によって破壊されている。この建物は桁行3間以上の東西棟建物の南廂と推定される。

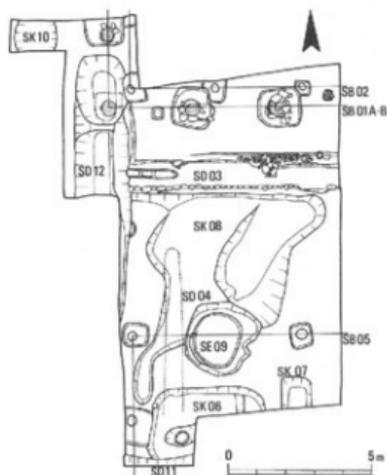
井戸は発掘区西南隅で検出された直径4m以上と推定される円形掘形の一部分で、埋土は鎌倉期の瓦片が多量に混入していた。その形状から井戸と推定される。

今回の調査の結果、創建金堂は入側柱の痕跡を残さない点で、今後の調査の進展にまたねばならないが、一応、身舎を礎石建と考えると、現本堂下の建物跡を含めて、創建法華寺の建築構造、手法に注目すべき点が多い。また、今回検出した金堂南側柱の東柱間は、ちょうど、現伽藍中軸線上にあり、伽藍中軸線は創建以来かわらないものと推定される。

#### 経楼推定地の調査(第98-17)

この調査は、法華寺境内での収蔵庫建設計画にもとづく現状変更事前発掘調査である。当該地は、境内西南地域で畑地となっている。

法華寺の伽藍配置については、過去に幾度か行われた調査の積み重ねにより、また地形から推定される東西両塔の位置や中門の位置等により、おおむねその状況が把握されている。とくに、昭和27年から行われた現本堂の解体修理



第13図 第98-17次調査遺構図

工事における地下調査によって、現本堂が原位置にあることが確認され、本堂の中軸線がほぼ伽藍中軸線となることが明らかにされている。さらに、昭和27年には現鐘樓の位置で凝灰岩基礎地形が検出されており、これは造営当初の鐘樓基礎であろうと推定されている。本堂中軸線と鐘樓中軸線との距離は、約37mあり、この距離を折り返した位置が今回の調査地区にあたり、ここに経楼跡の存在が予想された。

調査はまず3m幅の南北トレンチを設定して、遺構の残存状況を把握することから始めた。過去に畑地にされた際、かなりの土盛りが行われており、厚いところでは約0.9mあって、黄褐色バラス土、黒褐色粘質土等が互層に盛られていた。遺構検出面はおおむね黄褐色バラス混り粘質土であり、これはこの地域での地山である。

その結果、経楼推定地は後に削平を受けていることが判明し、わずかに北側雨落溝の推定位置に野面石組みの東西溝を検出した。しかし、その北側に根石を残す掘形の一部を検出したため、この石組溝が果して経楼に伴うものであるのか否かということも明確でなくなった。そのため、発掘区を拡張して遺構の性格をより明確に把握することに努めた。

こうした調査の結果、掘立柱建物3、溝3、土壇2、井戸1を検出した。

建物SB01Aは掘立柱建物であり、柱穴4個を検出した。いずれも1辺1mをこえる大きな掘形であり、すべてに柱根が残っていた。柱根は直径60～70cmの太さを持ち、面取りが施された痕跡も認められるが、規格的になされたものであるのかは明確でない。柱根の下には、柱を安定させるために瓦片が詰められており、軒丸瓦6285A、軒平瓦6667Aが混在していた。このSB01Aの柱間寸法は、東西方向3m、南北方向2.7mであり、東西棟と推定される。このSB01Aの柱は、後に根本で切断され、礎石立ち建物に改造された(SB01B)ことが残存した根石によって明らかである。建物SB02は東西方向の柱間寸法3mの掘立柱建物である。南北方向は西側柱筋で南から2個めの掘形をごく一部検出したのみであるため明らかでない。建物SB05は東西・南北とも柱

間寸法 3 m の掘立柱建物である。SB02・05とも柱根は残っていない。

溝SB03は野面石を両岸に用いた東西方向の溝である。南岸の石は護岸施設であるが、北岸に見られる数個の石は護岸施設そのものではないようである。この北岸は約40cm幅で1段掘り下げられており、ここに多量の瓦片をとまっている。こうした状況は、北岸施設の裏込めとして用いられたものであり、ここにみられる石は地覆下の延石と考えられよう。したがって、溝SD03は建物SB01Aを建物SB01Bに改造した時点で基壇が築かれ、その際に設けられた雨落溝とかがえるのが適当だろう。

溝SD03の南側は浅く土壌状に削平されており（SK08）、多量の土器片が出土した。この地域は中世以降、近世に至るまで幾度となく掘削、整地がくり返されており、溝（SD04・11・12）、土壌（SK07・10）、井戸（SE09）等が随所に見られる。

溝SD12は幅約2mの南北溝である。この地域から南流する溝であるが、SB01の西南隅にかけて掘り始められたものが、柱根にかかったためか、西南隅の柱根をはずれて再び掘り始めている。出土遺物から中世以降の掘削であることが明らかである。SE09は直径3mちかい掘形をもつ井戸である。井戸枠は見られず素掘りであり、近世のものである。

遺構の検出状況は以上のごとくである。当初予想した位置には経路跡がみられず、掘立柱建物SB05の一部を検出したのみである。建物SB01Aは、柱根の下から出土した瓦片のうち軒瓦が天平初年を降るものでなく、この造営が8世紀の前半に行われたことを想定させる。また、南雨落溝の護岸石の裏込め土から8世紀後半の土器が出土している。おそらく掘立柱建物から礎石立ち建物への改造は、法華寺造営に伴ってのことであつたらう。

法華寺境内においては現本堂地下、本堂南・本堂東で検出した3棟が掘立柱を礎石立ちに改造したものであることが確認されている。これらは、すべての柱を一時に礎石立ちに改めるのではなく、南北側柱の中央部数間を掘立柱のままにしての改造である。したがって、今回検出した建物SB01A・Bも同様な造作で

ある可能性が認められる。

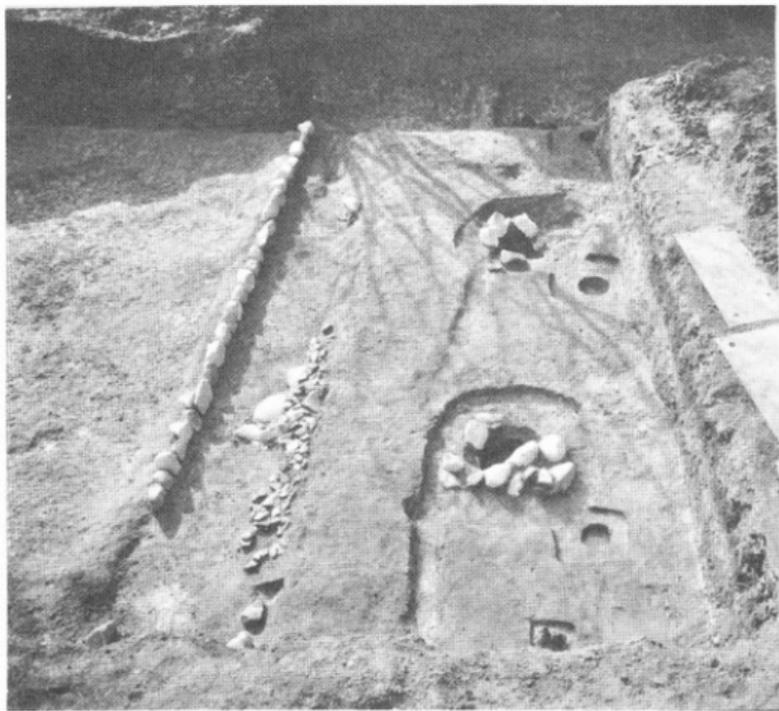
さて、今回の調査はその位置に経楼の存在が予想されたための事前調査でもあった。しかし、当初想定した位置に経楼としての遺構を検出することができなかった。そして、想定位置にかかって礎石立ち建物の存在することが明らかとなった。このことが直ちに、従来の成果にもとづいた伽藍配置全体や、ひいては伽藍中軸線が大きく異なるという問題に結びついてくるわけではないが、これらのことに投げかける問題はきわめて大きいと言え、今後の課題として深く検討せねばならない。

出土遺物は土器類と瓦類である。土器類の多くは土壌SK08から出上したものであり、多量の土師器、須恵器とともに約150点にのぼる施釉陶器片が出土している。瓦類は古代から近世にわたる。軒瓦は軒丸瓦56点、軒平瓦52点である。法華寺前身建物で6285A-6667Aを組合わせて用いていたことが明らかとなり、京内邸宅使用瓦の一端が明らかになった。瓦類の中には、緑釉及び二彩釉丸瓦片が各1点ある。また、奈良時代後期の整土層からは三彩陶、二彩陶の破片が多数でた。

その他(第98-18) この調査は、法華寺町における家屋改築にともなう現状変更事前調査である。発掘地は民家密集地で、法華寺町に属すが、平城宮と法華寺の間を南北に通る東一・二坊間大路推定地にあたる。

堆積土は単純な状況を示している。表土は黄褐色粘質土であり、地表下に暗黄褐色砂質土、暗褐色砂質土、赤褐色粘質土の順に堆積しており、その厚さは約90cmである。遺構検出面は赤褐色粘質土面である。その下層は黄褐色砂質土であり、この地域での地山である。発掘調査は南北約3m、東西約2.5mという狭少な範囲のため、わずかに赤褐色粘質土面が東に下降することを確認した程度であったが、東端で大きく下がる落ちこみの一部を検出した。埋土は灰褐色砂質土であり、土壌と考えるより、溝の一部とするのが適当な状況である。この溝を、仮りに大路東側溝とした場合、推定第2次内裏・朝堂院の中軸線と溝心までの距離が約540mとなり、位置的には妥当なものとなる。溝そのものは隣家にわたる

ために発掘できなかったが、平城京条坊に関する資料をさらに加えることとなった。



第14図 第98-17次調査遺構（東から）

## V その他の発掘調査

平城宮西面大垣外の調査(第98-11) 建物増築にともなう発掘調査。西面大垣の西方約50m、西面北門前の条間路南側溝の遺構が予想された。敷地の南より東西4m、南北7mのトレンチを設け280㎡を調査した。

調査地の土層は、厚さ1.0m内外の黄色粘土の盛土、旧表土(厚さ25cm)灰黄色砂質土(厚さ15cm)とつづき、灰紫色粘質土になると奈良時代の遺構面である。検出遺構は柱穴2であり、2.1mをへだてて南北にならぶ。トレンチが南に片寄ったためか、目的の南側溝を検出するに至らなかった。

下水道管理設工事にともなう調査(第98-14) 奈良県浄化センター建設事務所に協力し、下水道管理設工事にともなう調査を行った。

唐招提寺南門の東方、県道奈良・大和郡山・斑鳩線沿いの東側において、西一坊大路東側側溝を確かめる調査を行う。(回数外、1976年10月19日～28日)

検出した遺構は柱穴2および土壌数カ所である。目的としていた西一坊大路東側側溝は、発掘区内では検出されなかった。

発掘区内の地山は黄緑色の粘土で、その上層には瓦器・瓦片を混えた暗灰色の粘土が、厚さ40cmから1mにわたって堆積していた。暗灰色粘土の上層は水田耕作時の床土と耕土で、さらにその上に近年の造成による盛土がなされていた。

地山は南へむかって大きな傾斜をもち、そのうえ激しい凹凸があった。地山の絶対高は海拔58.9mから海拔59.6mである。

柱穴2は発掘区北西部の地山の比較的高い部分で東西に並んで検出された。西方は発掘区外となり、東方は地山の削平が甚しいため未検出で、遺構の性格をつかむまでには至らなかった。遺構の時期についても不明であるが、上述の粘土の堆積より下層で検出されたので、中世を降ることはないと考えられる。もしこの遺構が奈良時代のものであるとすれば、左京五条一坊三坪の遺構ということになり、大路側溝は発掘区よりさらに西側の泉道下に想定されよう。

土壌は発掘区全域にわたり、埋土に含まれる遺物は主として瓦器と瓦片である。

瓦の総量はセメント袋で一袋である。このうち年代の判明する瓦で奈良時代のものは、平城宮の6236型式一点で、他は一般の丸・平瓦である。

土器の総量は平箱に2ケースで、その大半が中世にぞくする瓦器で占められる。それらは鉢・皿の類で、ほとんどが破片であるが、保存がよく、12世紀頃の瓦器の良好な資料である。

1977年1月から3月の間に、3次に亘って奈良県立奈良病院奥連下水道管渠築造工事にともなう事前調査をおこなった。

a) 第1次調査として、1月19日から26日まで、奈良市五条町内に設定された発進坑No3および到達坑No4の2箇所が発掘調査をした。両地点は唐招提寺南門に南接して東西に走る市道敷上に位置し、それぞれ南門心から約114m、52m東にあたる。

立坑は東西6.5m、南北3.5mほどの長方形で、四壁には長さ7~11mの鉄製パイプを打ちこみ、バックフォーで旧水田床土と思われる青灰色粘質土面まで掘削・排土し、その後手掘りによる発掘調査をおこなった。

検出した遺構は、No3、No4ともに、近世および中世の東西溝各1条ずつである。これら東西溝は、その掘れと両地点間の距離から考えると、各々が同一の溝である可能性が強い。本地点は平城京条坊における五条条間路の北側溝に該当する位置と考えられたのであるが、残念ながら奈良時代の遺構は検出できなかった。しかしながら、これら中・近世の溝が京の条坊を踏襲したものであった可能性は残る。ちなみに、中世の溝心は图上調査法第6座標系X-147345.500m前後を通るが、この値に朱雀大路の振れN15'41"Wを考慮するとX-147339.300m前後となり、平城宮第39次調査で得た二条条間大路心の座標X-145751.977との差は約1587mとなる。五条条間路の側溝心心距離を4丈(12m)とみれば、両条間路心間の距離は $1587+6=1593m$ となり、3条分の距離( $1800\text{尺}\times 0.295\text{m}\times 3=1593\text{m}$ )とびったり一致するのである。

なお、No4地点の近世溝内には大量の瓦が落ちこんでいた。いずれも瓦当面を

南に向けており、北に位置する建物からずり落ちたような状態であった。近世時には、溝の北側に唐招提寺と関連する築地のような構築物があったものと解し得る。

出土した遺物は、近世のものを主に、中世期のものを混じえ、若干の奈良・平安時代に属するものがある。瓦類はその量極めて多く、総量平箱25杯分ある。近世瓦の中には特殊な刻印を有するもの20種76点が含まれていた。土器類の量は相対的に少なく平箱1杯程度、大部分が瓦器である。特殊な遺物として瓦質の火舎が挙げられる。№3地点の中世澄景下層から出土したもので、鎌倉時代の作と考えられる。

b) 1977年2月22・23の両日、平松町内で第2次調査を実施した。調査地点は県立病院建設地の東南100mほどの位置にあたる農道上である。当該地は水田畔の遺存状況から、また平城宮第100次調査で検出した大路跡の北延長線上にあたるので、平城京右京三坊大路西側溝の存在が予測された。南北農道上で10個、東西道上に2個の60×100cmほどのグリッドを設定し、南から1～12と名づけて調査を進めた。5・10地点を道幅いっぱい拡大、また11地点を東西に拡げた結果、これら3地点で3層に重複した南北溝各1条を検出した。これらの溝はほとんど遺物を含まず、ただ10地点の中層溝から中世期の瓦片数片を得たのみである。したがって、各々の溝の年代決定は困難であるが、下層溝が三坊大路西側溝である可能性は残る。

c) 1977年3月25日から30日まで、第3次調査を平松町内で実施した。調査地は垂仁天皇陵古墳の西南約200m付近で、平城京条坊における二坊坊間の坪境小路に相当する位置と推定された。

下水管埋設用の掘削と併行して調査を進行した。現地表から1.5mほどまでは山砂による盛土で、盛土の下層は旧池の堆積土と思われる黒褐色粘質土（厚さ30cm内外）とその下部の灰色砂（厚さ20cmほど）が占め、さらにその下に厚さ50～70cm程度の青灰色砂質土層がある。以下は青灰砂の地山である。池の堆積土以下で断面観察をおこなったが、何らの遺構も存在せず、遺物の包含も認め

られなかった。

西大寺本坊の調査(第98-16) 1977年1月26日と27日の2日間、西大寺本坊内において、事務所改築にともなう事前調査を実施した。

調査地は、西大寺中大門推定地の南東約20mの地点で、すぐ北に接して1975年10月に同調査部が行った中大門推定地の調査では、西大寺造営以前の平城京条坊区画を示す一条条間小路の南北両側溝が検出されていた。

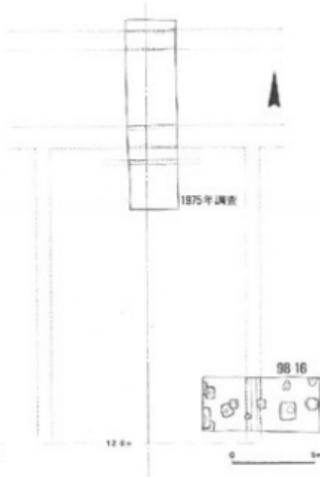
今回の調査では、南北3.3m、東西7.1mの東西方向のトレンチを設定し、現地表下約80cmの地山面で、奈良時代に属する南北溝1条、柱穴15ヶ所を検出した。地山面から上には約3回の整地面があり、それぞれ、室町時代、江戸時代、現代の整地面と考えられるが、これらの整地面では明確な遺構はなく、わずかに江戸時代の整地面に赤く焼けた焼土面が認められただけである。

遺構としては南北溝と柱穴がある。南北溝は、上端幅90cm、下底幅30cm、深さ20cmの浅い素掘りの溝で、溝埋土中から奈良時代の丸・平瓦、土師器・須恵器が少量出土した。

柱穴は15ヶ所を検出した。小規模のものもあるが、一辺1mをこえる大形の掘形もある。調査面積が少ないために建物ないし柵としてまとめることはできないが、柱穴規模からみて、相応の規模の建物群であったと推定される。柱穴の重複関係から少なくとも2時期ないし3時期の建て替えがある。また、層位的には、柱穴群より南北溝が新しいことが確認できた。

南北溝や柱穴の柱抜取穴から、奈良時代に属する土師器・須恵器・瓦類が少量出土した。いずれも遺存状態が悪く、小片である。

このような遺構は、西大寺造営以前に形成



第15図 第98-16次調査遺構図

された住宅地にもなる可能性が大である。

**法隆寺本坊西方地域発掘調査** この調査は、法隆寺寺務所新営計画にもとづく現状変更事前調査である。発掘地は、寺務所西側で大湯屋のすぐ南にあたる空地と、雑舎が存在する地域である。既存建物解体の関係から2次にわけて調査を実施した。発掘調査面積は664㎡である。

土層はおおむね単純な堆積状況を示しており、約20cm～40cmの表土層（黒褐色腐食土）直下は中世の瓦片や土器片を包含する黄褐色粘質土が約40cm～60cm堆積している。これは単一層ではあるが、西方では細砂を含んでいる。黄褐色粘質土の下層は、暗灰色粘質土層である。この層には古代から中世にわたる瓦及び土器片がわずかに包含されている。最下層は青灰色粘土であり、これは地山である。

建設予定地西半部の調査では、黄褐色粘質土面でも、暗褐色粘質土面でも、また地山面である青灰色粘土面においても何らの遺構も検出できなかった。東半部においては、地山面が比較的高く残っている。しかし、南にいくにしたがって次第に地山面は下降し、その上層は数度にわたる整地土が堆積している。これらのいずれの堆積土中にも近世の遺物が含まれており、しばしば大きく攪乱されることのあったことが知られた。今回の調査で注目すべきは、幅約2mの南北溝を検出したことである。この溝は、大湯屋の東方約10mの位置を南流するものであるが、大湯屋の南端から約12mの位置で終結する。そして、これは幅約5mの東西溝に接続する形となっている。溝から出土する遺物の中には近世に属するものも含まれているが、大湯屋の廃水を処理する施設であるとともに、大湯屋を区画する溝となる可能性も認められる。この他の遺構としては、長径約3m、短径約2m程度の池の一部を検出した。岸边部に人頭大の石がいくつか残っており、底に小石を敷いているが、残存状況はさほど良好ではない。小規模なものである。

